

《授業計画および学習指導案》

1 授業計画

教科	古典	指導学年	3年（普通科・選択）
単元	『物語（二） 源氏物語』～光源氏と関わる女性の生き方を通して、恋愛や結婚、女性としての生き方、感じ方を探ろう～		
教科書	高等学校 標準古典（第一学習社）	資料準備	<b>ワークシート①・②</b> 「課題研究の進め方」プリント 『増補四訂カラー版 新国語便覧』 （第一学習社）
単元目標	<p>ア 教科書解説や便覧等で源氏物語の成立時代を把握し、長編物語の全体構成の輪郭を理解する。</p> <p>また、物語を構成する主人公とこれをめぐる諸人物たちの人間関係の諸相を理解する。</p> <p>イ 光源氏の青年時代がどのような女性たちとのかかわりの中で構成されているかをとらえる。</p> <p>ウ 光源氏とかかわった女性たちの生き方についてとらえ、人間の生き方、愛することの奥深さに気づく。</p>		
学習活動における	関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
具体的評価規準	<p>①『源氏物語』の文章を読んで、作者の意図や表現の特色をとらえようとしている。</p> <p>②グループ学習をとおして、課題について考え、自分なりの意見や感想をもとうとしている。</p>	<p>①教科書本文から、語句や表現に注意して、登場人物の心情や場面の状況を捉える。</p> <p>②教科書以外の『源氏物語』関連文章を読むことで、自分の研究対象としている女性の全体像を多面的につかむ。</p> <p>③文章から当時の結婚や恋愛の形態、人間の普遍的な感じ方、考え方をとらえている。</p>	<p>①文学史や古文常識、当時の貴族の生活等を理解している。</p> <p>②古語について、現代語との違いや独特の言い回しを理解している。</p> <p>③インターネットによる検索方法を理解している。</p>
学習計画（全11時間）	<p><b>第1時</b> ～ <b>第2時</b></p> <p>・便覧『源氏物語』を読みながら、日本史・文学史的な要素も含めて理解する。</p> <p>・『源氏物語』「桐壺」の読解を通して、『源氏物語』の特徴ある文体や表現を理解し、物語のおもしろさに気づく。</p> <p>※『新編日本古典文学全集』（小学館）より抜粋の<b>ワークシート①</b>で一斉学習（一部音読による学習形態も取り入れる）し、人物研究をする動機付けとする。</p> <p><b>第3時</b></p> <p>・DVD「『源氏物語』誕生」を鑑賞し、作者、作品を理解する。</p> <p><b>第4時</b> ～ <b>第8時</b></p>		

《グループ学習を通して人物研究をする》

・1班3人ずつの4グループを作り、それぞれ「A 夕顔」「B 葵」「C 紫の上」「D 明石の君」の中から一人選び、研究の対象をグループごとに決定する。

↓

決定したら、それぞれの女性について以下のことをまとめる

- (ア) 教科書本文を口語訳し、注釈をつける。 ※ワークシート②使用
- (イ) 光源氏との出会いと結婚が書かれている文章を注釈書によって確認する。
- (ウ) 生い立ち(出身階級・親の存在・経歴等)から「死」までの一生をまとめる。
- (エ) どのようないきさつで光源氏と結婚することになったのか、まとめる。
- (オ) 結婚の形態はどうだったか。また、結婚後、妻としての立場はどのようであったのか、関連資料を参考にしながらまとめる。
- (カ) 物語の中でどのような役割を果たしているか話し合い、意見を書く。
- (キ) (ア)～(カ)の結果をレポートにまとめ、清書し、提出する。

※グループ学習のやり方についてはプリントを配布して説明する。

※場所は図書室を利用するが、教室内のインターネットを使って調べてもよい。

※教員は各グループが脱線しないよう声かけを行い、必要に応じて参考図書の紹介や調べ方の助言をする。

※グループの雰囲気大切に、個人の先入観にとらわれないように生徒を導くことを常に頭に置く。

第9時 ～ 第10時

・各グループごとに研究した、A～Dの女性についてまとめ、発表する。

※「A 夕顔」から順番に発表し、1班1人物が終了したら、質疑応答の時間とする。

第11時

・各グループから補足説明があれば、発表する。

・最後に自分の研究した女性について感じたことや感想を述べる。

※書きやすいよう、アンケート形式で自由に書かせる。

## 2 学習指導案

本時の目標 (全11時間 中第4時)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・光源氏と4人の女性とのかかわりについて、教科書や参考資料から読みとる。</li> <li>・グループ学習の形態を通して、協力して課題に取り組み、研究対象の女性についての理解を深める。</li> <li>・図書室やインターネットを利用し、参考資料の活用の仕方を身につける。</li> </ul>			
段階	時間	学習活動	指導上の留意点	評価の実際 (cの生徒への手だて等)
導入	5分	1 前時の復習をする (『源氏物語』の内容、作者について確認する。)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・便覧を使って確認させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文学史的な面から『源氏物語』を理解している。</li> </ul> 【知識・理解①】
		2 今後の学習の仕方を確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時に視聴したDVDの感想を質</li> </ul>	

		する。	問して、意識を喚起する。 ・グループ学習に入ることを認識させる。	
展開 1	10分	1 グループで「夕顔」「葵」「紫の上」「明石の君」の中から、どの人物を研究対象とするか話し合う。	・便覧を使用し、各人物についてもう一度確認させる。 ・机間指導し、グループ内でうまく話が進むようアドバイスする。	・4人の女性の人物像について興味をもって取り組んでいる。 【関心・意欲・態度①】 Cの生徒への手だて等 分かりづらい場合には、人物について指導者が口頭で説明し、興味をもたせる。
	5分	2 各グループごとに誰を研究対象とするか決め、班同士で調整する。	・「夕顔」「葵」「紫の上」「明石の君」の順に聞き、なぜ、その人物を選んだか理由を言えるようにする。 ・一人の人物を複数班が希望した場合には、話し合いの場を設ける。	・グループ内の話し合いに参加して、自分の意見を述べている。 【関心・意欲・態度②】
展開 2	25分	3 課題研究の進め方について確認し、課題内容を理解する。 ・参考資料の使い方を確認する。  4 各グループで課題研究を進める。 ・グループで話し合い、誰がどの課題を担当するか決め、その課題についてどう取り組むか考える。 ・参考となる資料を探し、人物研究をする。	・「課題研究の進め方」のプリントを配布し、【研究の進め方】について詳しく説明する。 ・各グループで共通して使える参考資料（古典文学全集や口語訳本など）は紹介しておく。 ・インターネットを使用して調べる時は、その内容をよく精査して、促す。 ・課題の進め方、分担についてはグループごとに話し合わせるが、スムーズに進められるよう様子を見ながら机間指導し、適宜、助言する。  ・口語訳の資料ばかりでなく、エッセイや解説本、図版等も参考になることを伝え、積極的に図書に触れさせる。	Cの生徒への手だて等 話し合いに参加できない場合には、人物に関する情報を紹介することで人物に対する関心を引き出す。また、友人と協力してもいい旨を話し、課題に取り組みやすいようにする。  ・参考資料のありかやインターネットによる検索方法を理解している。 【知識・理解③】 Cの生徒への手だて等 インターネットによる検索方法が分からない場合には友人に聞いてみるよう促す。  ・教科書以外の資料

				<p>からも研究対象の女性の全体像をつかんでいる。</p> <p><b>【読む能力②】</b></p> <p>〔Cの生徒への手だて等〕 教科書の内容(口語訳)を確認して、両者を比較して共通点や相違点を見付けるよう助言する。</p>
まとめ	5分	1 本時の進行状況をグループ内で確認する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループごとに集まり，作業確認を行わせる。</li> <li>・[展開2]で受けた質問で，各グループに共通することは学級全員で共有させる。</li> <li>・必要であれば，図書室から本を借り，予習させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時を振り返り，登場人物に対する自分なりの意見や感想をもととしている。</li> </ul> <p><b>【関心・意欲・態度②】</b></p>

### 3年古典選択 課題研究『源氏物語』 研究の進め方について

#### 【課題】

1班3人ずつで4グループを作り、それぞれ「A夕顔」「B葵」「C紫の上」「D明石の上」の中から一人選び、人物研究をする

#### 【研究の進め方】

- 1 便覧「『源氏物語』年表」全10ページより、該当（A～D）の女性が出てくる記述を抜き出し、マークする。全集等でその部分を抜き出し、人物読解の参考にする。
- 2 教科書本文を口語訳し、注釈をつける。→ワークシート②使用
- 3 生い立ち（出身階級・親の存在・経歴等）から、あるいは「死」までの、一生を概略にまとめる。
- 4 どのようないきさつで光源氏と結婚することになったのか。
- 5 結婚の形態はどうだったか。また、結婚後妻としての立場はどのようなであったのか。
- 6 物語の中でその人物がどのような役割を果たしているか。
- 7 光源氏との出会いと結婚が書かれている記事を注釈書によって確認し、提示する。
- 8 結果をレポートにまとめ、清書し、提出する。

#### 【発表】

- 9 各グループごとに、研究したA～Dそれぞれの人物について発表する。

#### ※注意※

- 1 作家や研究者による現代語全訳、解説書や入門書を手引きとしてどんどん読み、活用してください。
- 2 グループで参考とした書籍はすべて書名・作者名・出版社名（できれば頁数も）記録し、**研究発表の一番最後の頁に「参考文献一覧」として記述すること。**
- 3 グループ内で**意見の違い**が出たときは、お互いに**納得するまで話し合ってください**（けんかしたり、しらけてはいけません!）。協力し合ってレポートを進めましょう。
- 4 研究発表は1班**10～15分程度**でお願いします。
- 5 **各自自主的に課題に取り組み、『源氏物語』の世界を楽しみましょう♪**

## 【桐壺】

光る君

いづれの御時にか、女御・更衣あまた候ひ給ひける中に、いとやむごとなききはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。初めより我はと思ひあがり給へる御方々、めざましきものに、おとしめ、そねみ給ふ。同じほど、それより下罽の更衣たちは、ましてやすからず。朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積りにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよ飽かずあはれなるもの思ほして、人のそしりをもえはばからせ給はず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。上達部・上人なども、あいなく目をそばめつつ、いとまばゆき人の御おぼえなり。唐土にも、かかることの起りにこそ、世も乱れあしかりけれと、やうやう天の下にも、あぢきなう、人のもて悩みぐさになりて、楊貴妃のためしも引き出でつべくなりゆくに、いとほしたなきこと多かれど、かたじけなき御心ばへのたくひなきを頼みにて、まじらひ給ふ。

父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人の、よしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえはなやかなる御方々にもいたう劣らず、何事の儀式をもてなし給ひけれど、とりたててはかばかしき後見しなければ、ことあるときは、なほよりどころなく、心細げなり。

前の世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男皇子さへ生まれ給ひぬ。いっしかと心もとながらせ給ひて、急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなるちごの御かたちなり。一の皇子は、右大臣の女御の御腹にて、よせ重く、疑ひなきまうけの君と、世にもてかしづき聞こゆれど、この御にほひには並び給ふべくもあらざりければ、おほかたのやむごとなき御思ひにて、この君をば、私物に思ほしかしづき給ふこと限りなし。

初めよりおしなべての上宮仕へし給ふべききはあらざりき。おぼえいとやむごとなく、上衆めかしけれど、わりなくまつはさせ給ふあまりに、さるべき御遊びの折々、何事にもゆゑあることのふしぶしには、まづまう上らせ給ふ、あるときには大殿籠り過ぐして、やがて候はせ給ひなど、あながちに御前去らずもてなさせ給ひしほどに、おのづから軽き方にも見えしを、この皇子生まれ給ひてのちは、いと心ことに思ほしおきてたれば、坊にも、ようせずは、この皇子のゐ給ふべきなめりと、一の皇子の女御はおぼし疑へり。人より先に参り給ひて、やむごとなき御思ひなべてならず、皇女たちなどもおはしませば、この御方の御いさめをのみぞ、なほわづらはしう、心苦しう思ひ聞こえさせ給ひける。

かしこき御かげをば頼み聞こえながら、おとしめ、疵を求め給ふ人は多く、わが身はか弱くものはかなきありさまにて、なかなかなるもの思ひをぞし給ふ。御局は桐壺なり。

どの（帝の）御代であったか、女御や更衣が大勢お仕えしていらつしやった中に、それほど高貴な身分ではない方で、きわだつて帝のご寵愛を受けていらつしやる方があつた。（桐壺の更衣である。）（宮仕えの）最初から自分こそは（帝の寵愛を得よう）と自負していらつしやつた（女御の）方々は、（この方を）目にあまるものと、さげすんだり、ねたんだりなさる。（この方と）同じ身分、それより身分の低い更衣たちは、（女御の方々よりも）まして気持ちがおさまらない。朝夕の宮仕えにつけても、ひどく他の女性たちの嫉妬をかきたてるばかりで、恨みを受けることが積もつたのだろうか、ひどく病気がちになつてゆき、何となく心細そうに実家に下がることが多いのを、（帝は）いよいよたまらないほどいとしく不憫なものにお思ひになつて、人々の非難をものはばかることがおできにならず、世の語りぐさにもなつてしまひそうなご待遇ぶりである。上達部や殿上人なども、無愛想に目をそらしそらしするありさまで、まことに見てはいられないほどの更衣に対する（帝の）ご寵愛である。中国でも、このような原因によつて、世の中も乱れ、悪いことになつたものだど、だんだん世間一般でも、苦々しく、人々のもの悩みの種になつて、楊貴妃の先例までも引き合ひに出してしまひそうになつていくので、（更衣は）とてもいたたまれないことが多いけれど、恐れ多い帝のご寵愛が比類ないのを頼りとして、（ほかの女性たちの間に）立ち混じつて（宮仕えを続けて）いらつしやる。

父の大納言は亡くなつて、母である（大納言の）北の方が、古い家柄の出の人で、教養ある人で、両親がうちそらい、現在世間の評判が華々しい御方々にもさほど劣らぬように、（宮中の）何事の儀式の折にもとりはからつていらつしやつたけれども、これといったしつかりした後見人がいないので、特別なことのあるときは、やはり頼るところもなく、心細い様子である。

前世においても、ご宿縁が深かつたのだろうか、世にまたとなく清らかで美しい玉のような皇子までもお生まれになつた。（帝は）早く見たいと待ち遠しくお思ひになつて、（その若君を）急ぎ参内させて御覧になると、世にもすぐれた幼子のお顔立ちである。第一皇子は、右大臣の（姫君である）女御の御腹（より生まれた皇子）であつて、後見がしつかりし、疑いない皇太子（になられるお方）として、世間でも大切にお仕え申し上げているが、第二皇子の照り映えるお美しさにはお並びになりようもなかつたので、（帝は第一皇子に対しては）並ひととおりの大切なお方といったご寵愛であつて、この君を、かわいひ秘蔵つ子とお思ひになり大切にお世話なさることはこのうえない。

もともと（更衣は）普通一般の天皇のそば仕えをなさるはずの身分ではなかつた。世間の評価もたいへん重々しく、高貴な人らしく見えるが、（帝が）むやみに近くにおつきまとわせなさるあまりに、しかるべき管弦のお遊びの折々や、何事でも由緒ある行事のふ

しぶしには、まっ先に参上させなさる、またあるときにはお寝過ごしになって、そのまま（翌日も）おそばにお仕えさせになるなど、無理やりにおそばから下がらせないよう待遇なさっていたうちに、自然と身分の軽い人にも見えたのだけれど、この皇子がお生まれになつてからは、たいそう格別に待遇しようとお心づもりなさっていたので、皇太子にも、悪くすると、この皇子がおつきになりそうに見えると、一の皇子の（母である弘こき俊殿でんの）女御はお疑いになつていた。（この女御は）ほかの方より先に入内じゅだいなさつて、（帝の）大切にお思いになるお気持ちには並々でなく、皇女たちなどもいらつしやるので、この御方のお諫めだけを、やはり氣遣いなさり、氣の毒なこともお思い申し上げていらつしやつた。

（更衣は帝の）恐れ多いご庇護を頼り申し上げるのだけれど、（一方では）さげすみ、欠点をお探しになる人は多く、自分の身はか弱くはかない様子であつて、かえつて（ご寵愛がなかつたらよかつたのに）という思い悩みをなさる。（その更衣の）お部屋は桐壺きりぎすである。



夕顔

そのわたり近きながしの院におはしまし着きて、預かり召し出づるほど、荒れたる門の、しのぶ草茂りて見上げられたる、たとしへなく木暗し。霧も深く露けきに、簾をさへ上げ給へれば、御袖もいたくぬれにけり。「まだかやうなることをならはざりつるを、心づくしなることにもありけるかな。

いにしへもかくやは人の惑ひけむわがまだ知らぬしののめの道ならひ給へりや。」とのたまふ。女、はぢらひて、

「山の端の心も知らで行く月はうはの空にてかげや絶えなむ心細く。」とて、もの恐ろしう、すごげに思ひたれば、かのさしつどひたる住まひの心ならひならむと、をかしくおぼす。御車入れさせて、西の対に御座などよそふほど、高欄に御車引きかけて立ち給へり。右近、艶なる心地して、来し方のことなども、人知れず思ひ出でけり。預かり、いみじく経営しありくけしきに、この御ありさま知り果てぬ。

ほのぼののともに見ゆるほどに、下り給ひぬめり。かりそめなれど、清げにしつらひたり。「御供に人も候はざりけり。不便なるわざかな。」とて、むつましき下家司にて、殿にもつかうまつる者なりけ

れば、参り寄りて、「さるべき人、召すべきにや。」など申さすれど、「ことさらに人來まじき隠れ家、求めたるなり。さらに心よりほかに漏らすな。」と、口がためさせ給ふ。御粥など急ぎ参らせたれど、取り次ぐ御まかなひ、うちあはず。まだ知らぬことなる御旅寝に、息長川と契り給ふことよりほかのことなし。

日たくるほどに起き給ひて、格子、手づから上げ給ふ。いといたく荒れて、人目もなく、はるばると見わたされて、木立いと疎ましく、ものふりたり。け近き草木などは、ことに見どころなく、みな秋の野らにて、池も水草に埋もれたれば、いとけ疎げになりける所かな。別納の方にぞ曹司などして人住むべかめれど、こなたは離れたり。「け疎くもなりにける所かな。さりとも、鬼なども我をば見許してむ。」とのたまふ。顔はなほ隠し給へれど、女のいとつらしと思へれば、げにかばかりにて隔てあらむも、ことのさまにたがひたりとおぼして、

「夕露にひもとく花は玉ぼこのたよりに見えし縁にこそありけれ露の光やいかに。」とのたまへば、後目に見おこせて、

光ありと見し夕顔の上露はたそかれ時の空目なりけりと、ほのかに言ふ。をかしとおぼしなす。げに、うちとけ給へるさま、世になく、所がら、まいてゆゆしきまで見え給ふ。

## 葵の上

若君のいとゆゆしきまで見え給ふ御ありさまを、今から、いとさまことに、もてかしづき聞こえ給ふさまおろかならず、こと合ひたる心地して、大臣もうれしういみじと思ひ聞こえ給へるに、ただこの御心地おこたり果て給はぬを、心もとなくおぼせど、さばかりいみじかりし名残にこそはとおぼして、いかでかは、さのみは心をも惑はし給はむ。

若君の御まみのうつくしさなどの、春宮にいみじう似奉り給へるを、見奉り給ひても、まづ恋しう思ひ出でられさせ給ふに、忍びがたくて、参り給はむとて、「内裏などにもあまり久しう参り侍らねば、いぶせさに、今日なむ初立ちし侍るを、少しけ近きほどにて聞こえさせばや。あまりおぼつかなき御心の隔てかな。」と恨み聞こえ給へれば、「げに、ただひとへに艶にのみあるべき御仲にもあらぬを、いたう衰へ給へりといひながら、物越しにてなどあべきかは。」とて、臥し給へる所に御座近う参りたれば、入りて、ものなご聞こえ給ふ。御いらへ、時々聞こえ給ふも、なほいと弱げなり。

「いさや、聞こえまほしきこといと多かれど、まだいとたゆげに

おぼしためればこそ。」とて、「御湯参れ。」などさへ、あつかひ聞こえ給ふを、いつならひ給ひけむと、人々あはれがり聞こゆ。

いとをかしげなる人の、いたう弱りそこなはれて、あるかなきかのけしきにて臥し給へるさま、いとらうたげに心苦しげなり。御髪の乱れたる筋もなく、はらはらとかかれる枕のほど、ありがたきまで見ゆれば、年ごろ、何事を、飽かぬことありて思ひつらむと、あやしきまでうちまもられ給ふ。「院などに参りて、いととうまかでなむ。かやうにて、おぼつかなからず見奉らば、うれしかるべきを、宮のつとおはするに、心地なくやとつみて過ぐしつるも苦しきを、なほやうやう心強くおぼしなして、例の御座所にこそ。あまり若くもてなし給へば、かたへは、かくもものし給ふぞ。」など聞こえ置き給ひて、いと清げにうち装束きて出で給ふを、常よりは目とどめて見出だして臥し給へり。

清げなる大人二人ばかり、さては童べぞ、出で入り遊ぶ。中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などのなえたる着て、走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えて、うつくしげなるかたちなり。髪は、扇を広げたるやうにゆらゆらとして、顔は、いと赤くすりなして立てり。

「何事ぞや。童べと腹立ち給へるか。」とて、尼君の見上げたるに、少しおぼえたるところあれば、子なめりと見給ふ。「雀の子を、犬君が逃がしつる。伏籠の内にこめたりつるものを。」とて、いとくちをしと思へり。このみたる大人、「例の、心なしの、かかるわざをしてさいなまるこそ、いと心づきなけれ。いづ方へかまかりぬる。いとをかしう、やうやうなりつるものを。烏などもこそ見つけれ。」とて、立ちて行く。髪ゆるるかにいと長く、めやすき人なめり。少納言の乳母とぞ人言ふめるは、この子の後見なるべし。

尼君、「いで、あなをさなや。言ふかひなうものし給ふかな。おのが、かく今日明日におぼゆる命をば、何ともおぼしたらで、雀慕ひ給ふほどよ。罪得ることぞと、常に聞こゆるを、心憂く。」とて、

「こちや。」と言へば、ついゐたり。つらつきいとらうたげにて、まゆのわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざし、いみじうつくし。ねびゆかむさまゆかしき人かなと、目とまり給ふ。さるは、限りなう心を尽くし聞こゆる人に、いとよう似奉れるが、まもらるるなりけりと、思ふにも涙ぞ落つる。

尼君、髪をかきなでつつ、「けづることをうるさがり給へど、をかしの御髪や。いとはかなうものし給ふこそ、あはれにうしろめたけれ。かばかりになれば、いとかからぬ人もあるものを。故姫君は、十ばかりにて殿におくれ給ひしほど、いみじうものは思ひ知り給へりしぞかし。ただ今、おのれ見捨て奉らば、いかで世におはせむとすらむ。」とて、いみじく泣くを見給ふも、すずろに悲し。をさな心地にも、さすがにうちまもりて、伏し目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪、つやつやとめでたう見ゆ。

生ひ立たむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えむそらなき  
またゐたる大人、「げに。」とうち泣きて、

はつ草の生ひゆく末も知らぬまにかでか露の消えむとすらむ

## 明石の君と姫君

雪かきくらし降り積もる朝、来し方行く末のこと、残らず思ひ續けて、例はことに端近なる出でゐなどもせぬを、汀の氷など見やりて、白き衣どものなよよかなるあまた着て、ながめゐたる様体、頭つき、後ろ手など、限りなき人と聞こゆとも、かうこそはおはすらめと、人々も見る。落つる涙をかき払ひて、「かやうならむ日、ましていかにおぼつかなからむ。」と、らうたげにうち嘆きて、雪深み深山の道は晴れずともなほふみ通へ跡絶えずしてとのたまへば、乳母うち泣きて、

雪間なき吉野の山をたづねても心の通ふ跡絶えめやは  
と言ひ慰む。

この雪少しとけて、渡り給へり。例は待ち聞こゆるに、さならむとおぼゆることにより、胸うちつぶれて、人やりならずおぼゆ。

「わが心にこそあらめ。いなび聞こえむを、強ひてやは。あぢきな。」とおぼゆれど、軽々しきやうなりと、せめて思ひ返す。

いとうつくしげにて前にゐ給へるを見給ふに、おろかには思ひがたかりける人の宿世かなと思ほす。この春より生ほす御髪、尼のほ

どにて、ゆらゆらとめでたく、つらつき、まみのかをれるほどなど、言へばさらなり。よそのものに思ひやらむほどの心の闇、おしはかり給ふに、いと心苦しければ、うち返しのたまひ明かす。「何か。かくくちをしき身のほどならずだに、もてなし給はば。」と聞こゆるものから、念じあへずうち泣くけはひ、あはれなり。

姫君は、何心もなく、御車に乗らむことを急ぎ給ふ。寄せたる所に、母君みづから抱きて出で給へり。片言の、声はいとうつくしうて、袖をとらへて「乗り給へ。」と引くも、いみじうおぼえて、

末遠き二葉の松に引き別れいつか木高きかげを見るべき

えも言ひやらず、いみじう泣けば、さりや、あな苦しとおぼして、

「生ひそめし根も深ければ武隈の松に小松の千代を並べむ

のどかにを。」と、慰め給ふ。さることとは思ひしづむれど、えなむ堪へざりける。乳母、少将とてあてやかなる人ばかり、御佩刀、天児やうのもの取りて乗る。副車に、よろしき若人、童など乗せて、御送りに参らす。道すがら、とまりつる人の心苦しさを、いかに、罪や得らむとおぼす。